共生が生かす 障害者の力

窯業長年支え 苦境にも新たな広がり

先進地 滋賀・信楽から

働く意欲のある障害者と伝統産業を橋渡しする試みが、京都で動き始めた。成功の鍵はどこにあるのか。甲賀市信楽町では半世紀以上にわたり、知的障害者が信楽焼の担い手を務め、業界の発展を支えてきた。しかし、近年は窯業の不振で働く場が激減。先進地の「いま」を取材して見えてくるのは、地域とのつながりの重要性だ。

工場内の食堂を清掃する鈴木さん。「いまの仕事に満足している」と話す（甲賀市信楽町江田）

信楽で障害者雇用を推し進めたのは故池田太郎さん（1908～87年）。「障害者福祉の父」と呼ばれた滋賀一雄さんらと近江学園を創設した。53年に全寮制の職業訓練施設「信楽学園」を設立。障害者を「保護すべき対象」とする考え方が主流だった当時、池田さんは障害者の自立を掲げ、窯元への就労を促進した。

当初は学園の設立自体に住民の理解を得られず、反対運動も起きた。だが、開校後まもなく発生した多羅尾豪雨で地域が被災。園生たちが復旧作業を手伝ったことで住民との交流が深まり、園生を雇う窯元が出てきた。65年には障害者雇用を進める窯元17社が「信楽町職親会」を設立し、慰安旅行や勤続表彰などを実施してきた。

しかし、信楽焼の需要低下に伴い窯元の数が激減。ピーク時の97年に145人いた障害者就労者は今年、15人にまで減った。

新たな就労先を探そうと、信楽学園の職員は今、地元の企業と折衝を続ける。園生の窯元での働きぶりをアピールし、受け入れに理解を求める。現在は、就労前の実習先として14事業所を確保。このうち6事業所は、スーパーや牧場、弁当製造工場など窯元以外の職場だ。

学園卒業生らが利用する障害者生活支援施設「信楽青年寮」施設長の上田清樹さん（60）は「窯元という職種に限らず就労への理解が得られているのは、障害者自身が信楽の住民と共生してきた歴史があるからこそ」と言う。

知的障害がある鈴木春代さん（50）は4年前、20年以上勤務してきた窯元を辞め、地元の電線製造会社「住友電工ウィンテック」に転職した。トイレや食堂の清掃に励む日々。不慣れな仕事に不安もあったが、作業順序を紙に書き出すなどして熱心に覚えた。トイレットペーパー補充など細部まで気を配れるようになるのが目標で、「きちんと仕事ができるようになりたい」と笑顔を見せる。同社では、他に3人の障害者が清掃員として勤務する。

窯業の不振は、人口流出など地域の空洞化を招き、商店街ではシャッターを閉める店舗も目立ってきた。障害者と住民が交流を深める機会が減りつつある中、信楽青年寮は昨年度から、寮生と住民が一緒に工作を楽しむワークショップを催している。週1回、寮職員が地元の子どもに勉強を教える学習支援にも取り組む。上田施設長は「障害があってもなくても、性別や年齢にかかわらず、互いに支え合い、誰もが安心して暮らせる町づくりのお手伝いをしたい」と語る。

（田代真也）

土曜フォーカス 2018

就労機会安定へ 行政・企業協力を

龍谷大 村井龍治教授

伝統産業の現場と障害者をつなげる自治体の取り組みについて、障害者福祉に詳しい龍谷大の村井龍治教授に聞いた。

―京都市の試みをどう評価する。

障害を「人の特性」と捉えたとても良い取り組みだと思う。障害者の活躍の場が広がり、安定した生活にもつながる。伝統産業以外の業界でも、障害の特性に目を向けるきっかけになるだろう。

―課題はあるか。

人手が足りないから障害者を雇うという意識のままでは、就労機会の安定的な確保にはつながらない。障害者を雇用するには、職場のバリアフリー化を進めたり、個別のマニュアルを作ったりと、さまざまな面でコストが必要となる。行政と企業が協力して、こうした課題を克服していくことが大事だ。

―展望は。

伝統産業そのものが衰退傾向にあり、障害者雇用を継続できるかという点で将来的な不安も残る。特定の業界だけでなく、社会全体で、粘り強く取り組んでいかなければならない。

（聞き手・辻孝典）